

フォークロアにおける死生の「物語り」

— 『遠野物語』 第九九話をめぐって

長谷川徹

はじめに

現代の日本社会において未曾有の死者・行方不明者を出した東日本大震災は、主な被災地となった東北の人々に無数の死別を経験させた。そうした点においても、それは第二次大戦時に次ぐほどの日本社会の悲劇として語り継がれていく出来事である。そこにはむろん、無数の死者たちと現に向き合って生きている・生きてゆかねばならない人々がいる。であるならば、震災後の東北が目指す復興がどのようなものであるにせよ、それは喪われた人々の追悼と鎮魂を抜きにして築き上げられるべきものではないように思う。すなわち新たな地域社会がどのような文化共同体であれ、喪われた人々の「死生」の記憶を何らかに繋留してゆくものでなければならぬだろう。なぜなら、文化共同体を現に生きるわれわれ日本人は、「死生」のあり方をめぐって、「靈魂観」や「他界観」といった観念を共有し、かつ儀礼習俗というかたちで共同することにおいて一つの文化共

同体をなしてきたからである。その意味で現代日本もまた、地域社会全体にわたる悲劇とそこでの数多の死別を受け、文化共同的な「死生」の枠組みをあらためて問い直し、「死生観」の再構築をはからうこと、そのためには何よりもまず社会的な「喪の仕事」に取り組むことこそが要請されているように思う。それはとりもなおさず、敗戦後の日本社会が抱えつつけてきた「戦没者慰霊」の問題とも直結するものであり、戦後日本という国のかたちを文化的に塑像・整備することにほかならないだろう。

ところで「喪に服す」ことが、喪失（の痛み／悲しみ）そのものを心に深く刻みつけることによって、まさに死者を「悼む」ことであるとすれば、およそ人間の文化的社会は追悼の機能を備えた「モニュメンタルなもの」を含むべきものではないだろうか。「モニュメント」の原義には「思い出させるもの」という語義を見出せるが、それはいわゆる「記念碑」のような、単に形式的なもの・メモリアルであることを意味するものではない。追悼や慰霊鎮魂の縁としてのそれは、記憶の確かな継承を恒久的に願うものとしてあるだろう。人間の文化的社会においては、共同体内部に死者たちの記憶を呼び起こす縁の内在・遍満していることが共同体たる由縁となるのであつて、それは共同体が死者をめぐる倫理基盤としての豊かな精神風土、すなわち死生観のアーカイヴを持つているということの意味しているのである。

言うまでもなく日本人は古代よりさまざまな死生観によって、「死後」や「死者」という存在の位置づけを取りはからつてきた。それはどの古典文献からもうかがえることだろう。『古事記』において、イザナキが死者の世界である黄泉国へ亡き妻イザナミを追いかけていったことは、古代人の世界が異界と地統きに感覚されていたという特有の他界観をも示しているし、『万葉集』には、「挽歌」という部立てにおいて死者の魂を鎮める歌が数多く集められている。また、中世の『平家物語』などを、琵琶法師らによる「戦没者慰霊」の祈りの声として聞くこともできるだろう。祖霊信仰における死者の追善供養は仏教の流入を経てなお、弔いの作法

として日本人の死生観の特質をなしていった。しかし、こうした死生観／死者観が現代にそのまま引き継がれているわけではむろんないし、近代化を経た文明社会によって改変・解体されて、われわれはかつての死生観の残滓を眺めることができるだけのようにも見える。それでもなお、大岡昇平『レイテ戦記』などの戦後文学や、現代作家においては村上春樹などの文学の底流にも、生き延びた者による死んでいった者への敬虔寡黙な服喪の態度を認めることができるように思う。むろん、古代や上代での死者の魂が素朴に実感されているかのような死生観と、現代の医療科学を通じて死者という「物語」が解体された死生観とは、かなりの懸隔を認めざるをえない。ここでは、日本精神史におけるそれぞれの死生観の内実について詳らかに検討していくことはできないが、いずれにせよ日本人は「死生」をめぐる豊かな精神風土としての死生観のアーカイヴによって、「死者」を悼み慰め、われわれにとって安定的なものに鎮める作業を怠っては来なかったのである。

一 「目前の出来事」としての『遠野物語』

日本人の魂のあり処やそのあり方をめぐる学究の中から近代日本国家と日本人の行方を思索した民俗学者に柳田國男がいる。柳田民俗学の基底の一つに置かれたのは、東北地方とりわけ遠野に伝わる民間伝承だった。それが明治四十三年に、遠野出身の佐々木喜善から柳田が聞き書きしたものをまとめて出版した『遠野物語』である。²

『遠野物語』において柳田は、実在したが辺境に名もなく埋もれてゆく人々——柳田はそれを「常民」と呼んだ——の記憶を掘り起こし、その虚飾なき裸形の姿をありのままに語りとどめておこうとした。それはすなわち彼らの「死生」を豊かに物語ることを通じて、彼らを悼み、慰霊し、鎮魂することでもある。そうした

意味において『遠野物語』は、「フォークロア」という仕方での鎮魂歌・挽歌でもあったのではないだろうか。かつそれは、単なる「昔々」と語り出される「日本昔話」でもなければ、「今は昔」と始められる「説話集」でもない。また、荒唐無稽な「奇談」にすぎないもの、でもない。東北に生きる／生きたリアルな日本人の生のかたちを写しとった一つの「モニュメント」なのである。それは「死生」のありようを際やかに露出させる言及であることにおいて、それぞれの「死生」に内側から光を当てるものであり、そのようにして一つひとつの「死生」を悼むものであるだろう。

『遠野物語』が、いまここに現前する生のかたちをかたどろうとするものであることは、柳田自身によって以下のように言われている。

況や我九百年前の先輩『今昔物語』の如きは其当時^{（一）}に在りて既に今は昔の話なりしに反し此は是目前の出来事なり。（……）要するに此書は現在の事実なり。単に此のみを以てするも立派なる存在理由ありと信ず。（『遠野物語』序）

遠野の人々にとつてのみならず、むしろ「物語」としてまとめた柳田においてもそれは、「現在の事実」として受け止められているのであつて、あくチュアルな「目前の出来事」の口承記録（Oration）なのである。

また『遠野物語』に収められた話は「実話怪談」とも言える怪異譚が目立つて多く採録されているが、柳田は、明治末期に隆盛を帯びた怪談文芸復興の潮流に棹さしながら古今の怪談を渉獵していく中で、次のように述べている。

怪談には全部嘘のものも少いが、また全部真個のものも少い。少しずつは大抵嘘が入っている。(……) この通り実際在りの儘の怪談と云うものは少く、多少皆嘘がある。(……)とにかく、近世明治になつてからの怪談書ばかりでも百種はあろう。また種々の随筆の中に一つ一つ交っているのも数百種はあろうが、その中純の純なるもの少しも嘘のないものは誠に少い。しかし私はその純の純なる物ばかり撰つて蒐めてゐる。これには無論鑑定眼も要るし随分骨も折れるがその代り非常に面白い。嘘の入らぬ純の純なるものには何とも云われぬ好い味のあるものがある。

こう述べたわずか三月後に刊行された『遠野物語』の各話は、それがいかに怪異なものであれ、まさに「嘘の入らぬ純の純なるもの」として柳田の目に映つていたことがうかがえるだろう。

二 死者との再会 第九九話

では、『遠野物語』において柳田は、「常民」の「嘘の入らぬ純の純なるもの」としての「生」の姿をどのよう「物語」つたのだろうか。『遠野物語』全体は多種多様な民間伝承が収載されており、その一つひとつをまとまつた思想観念として、とりわけ「死生観」として総括することはそれじたい大きな課題であり、慎重さを必要とする作業である。よつて本稿では、第九九話における幽霊譚に着目して、最愛の人を亡くした男が死者と再会し死者との関わりをみずから語り直すことによつて、彼の実存的な「生」の行方があぶり出されていく様を見届けたい。それは一種の「喪の仕事」として自己治癒へと向かつていく過程を見ることでもある。そしてさらに、一見怪談めいた死者との出会いの「物語」を「嘘の入らぬ純の純なるもの」として、「目前の出

来事」として受け入れ生きていく彼の「生」が、佐々木／柳田による『遠野物語』というすぐれてアクチュアルな「物語り」において、いわば鎮魂されていく様を見ていきたい。

『遠野物語』第九九話に取められたのは以下のような話である。それは明治二九年の三陸地震の際に、二万人を越す犠牲者を出した三陸大津波によって妻子を亡くした男の話である。男は壊滅的被害を受けた村里の少ない生き残りとなる。この話もまた、男の姉の孫であつた佐々木喜善が震災後十年余りを経て柳田に語つた実話である。以下に全文を引く。

土淵村の助役北川清と云ふ人の家は字火石に在り。代々の山臥にて祖父は正福院と云ひ、学者にて著作多く、村の為に尽したる人なり。清の弟に福二と云ふ人は海岸の田の浜へ墾に行きたるが、先年の大海嘯に遭ひて妻と子とを失ひ、生き残りたる二人の子と共に元の屋敷の地に小屋を掛けて一年ばかりありき。夏の初めの月夜に便所に起き出でしが、遠く離れたる所に在りて行く道も浪の打つ渚なり。霧の布きたる夜なりしが、その霧の中より男女二人の者の近よるを見れば、女は正しく亡くなりし我妻なり。思はず其跡をつけて、遙々と船越村の方へ行く崎の洞ある所まで追ひ行き、名を呼びたるに、振返りてにこと笑ひたり。男はと見れば此も同じ里の者にて海嘯の難に死せし者なり。自分が墾に入りし以前に互に深く心を通はせたりと聞きし男なり。今は此人と夫婦になりてありと云ふに、子供は可愛くは無いのかと云へば、女は少しく顔の色を変へて泣きたり。死したる人と物言ふとは思はれずして、悲しく情なくなりたれば足元を見て在りし間に、男女は再び足早にそこを立ち退きて、小浦へ行く道の山陰を廻り見えずなりたり。追ひかけて見たりしがふと死したる者なりしと心付き、夜明けまで道中に立ちて考へ、朝になりて帰りたり。其後久しく煩ひたりと云へり。

『遠野物語』の文体は、素朴なデッサンながら全体の調子に緩みがなく、そこに余分なものが入り込む間隙も渋滞も見あたらない。しかも奥深く分け入ってみれば臨場感のある細部を持つている。この第九九話もまた、語り口は簡潔だが、情景を適確に叙しつつ、話の勘所を細やかに押さえている。そうしてそこには、濃淡の深い陰翳と抑制された色彩の間に、時折光るものの差し込める一瞬の綾がある。この第九九話において、旧盆の頃の月夜に照らされ、霧の中から幽かに現われ出た亡き妻の横顔を見たときの福二の心の衝撃は、声なき声のごとく静かに語り置かれている。こうした柳田の叙述によって伝わってくるのは、むしろこの体験の生々しくヴィヴィッドな手触りにほかならない。『遠野物語』が「実話」ではあつても、単なる「実録」ではないゆえんである。それはきわめて文学的な強度を備えたナラティブ（物語り）であるだろう。その「物語り」は、決して単なる実話記録の平板な語りに留まることはなく、直截には手控えられている福二の心の深層をむしろ裸出せしめている。しかもそれは震災被害そのものの苦悩というよりも、震災を契機にあらためて確認・増幅されたところの、愛の亀裂に懊悩する心の動揺を伝えるものだ。震災被害というレヴェルを超えて露出し見出されてくる男の切実な情念の姿形であつて、危うい夫婦関係の粉飾なき物語である。

だが、それゆえに、なぜ福二はこのことを語り残したのかという疑問も当然に出てくるはずであろう。一夜のことは誰も知りえない秘めごとである。ほとんど福二の内心の出来事と言つてもいい。できれば隠しておきたい家庭の内輪話でもあり、その秘められた苦悩を曝け出すことにもなるだろう。その意味でそれはまさに「逸話」の類に属するべきはずのものである。普通であれば、どうにもならない過去のこととして、忘れ、遠ざけたいことのはずであらう。

いずれにしるそれは、「百年ほど前の当時にあつてはまさに」「目前の出来事」「現在の事実」として、まだ生

温かい記憶の相貌を持って受けとめられていただろう。

三 頻出する幽霊遭遇譚

この一話をめぐっては、「東北学」を提唱し、東日本大震災復興構想会議委員にもなった民俗学者の赤坂憲雄が、震災以降にあらためて話題にしてきた。赤坂もまた『遠野物語』を一種の「鎮魂の物語」として再読することを試みている。むろんそれは、二〇一一年の死者たちと生き残った者たち相互の物語を受け止める予備作業でもあるだろう。そうして赤坂は、列島において特異な位置を占めてきた東北という「辺境」のトポスト、『遠野物語』を視点軸に据えた、いわば『遠野物語』からの復興構想の可能性を探ろうとしている。本稿ではさらに、赤坂の再読に共振するかたちで第九九話を読み解いていきたいと思うが、その前に次のような現象に言及しておきたい。

赤坂によれば、震災後、被災地のいたるところで怪異譚が、なかならず幽霊に出遭うという話が溢れ出しているという。

いま、被災した海辺の村や町には、数も知れぬ幽霊譚が生まれ、語られているらしい。怪異な話であれば、わたし自身ですら体験しているし、ありふれたものとして転がっているのではないか。たとえば、たくさんの犠牲者が出た海を見下ろす道で、ある人が車で人を撥ねてしまった、しかし、恐る恐る外に出てみると、どこにも人の影はない、車にも傷がない、それでも不安で警察に届けると、ああ、また、あそこですか、すでに何人も人を轢いたと相談に来ていますけどね……。

あるいは、家の戸がガタガタ鳴るのを聞いて小さな子供が「お父さんが来た！」と叫ぶ話や、三陸沿岸で夕方になると浜辺の方から人が一斉に逃げてくる声がするという噂が広まり、夫を亡くした妻や子を喪った母親たちが、黄昏時そこに集まって来てはそれぞれの帰りを待っている、という話もあるようだ。

不慮の災禍による死者が多数いる被災地において、なぜ「幽霊」をめぐる話が一斉に噴出しているのか。浮遊する魂魄あるいは彷徨う死者としてのいわゆる「幽霊」は、一方で「観る者」を必要としているだろう。こうした「怪談」において語られる「幽霊」としての死者は、「観る」（あるいは「聞く」という特定の視点・主体の認識行為を俟ってはじめて存在可能となる一種の個別的な「現象」であるとも言えるのではないか。とすれば、死者との再会を待ち望む彼らにとつて「幽霊」は、ただの匿名的・記号的な死者などではない。歴然とした関係性を保ち認識されつづけている固有の顔と名前とを持った存在であるだろう。

少なくとも「死」を「私の死」という一人称からだけではなく、いわゆる二人称・三人称的視点からも考えるならば、それは「あなた／彼／彼女」に死なれた、という経験となるだろう。だから二万人近くの犠牲者がいるということ、それだけ多くの死者がいるということは、それぞれにそれ相応の死なれた人々がいるということでもある。そこでは、死者は彼らによつて「観られる者」という側面を持つ存在者であると言えるだろう。むろん福二もまた妻子に死なれた者であり、彼にとつて亡き妻との再会は、それを待ち望む福二の想いが立ちのぼらせた「幻想」であるとも言える。

問題は、そうした経験が当事者にとつては単なる「幻想」にすぎないものではなく、「現在の事実」であり「目前の出来事」として切実に体験されているというその意味である。赤坂は『遠野／物語考』で、『遠野物語拾遺』第一六〇話に見える大工の娘の生霊が出歩く話に触れつつ、次のように述べている。

人間は幻想を喰らって生きる動物である。ある幻想が共同化されている場所では、その幻想こそが唯一の現実であり、ときにはそれは物理的な死をもたらすことすらある。必要なのは幻想を生きられた現実として読みほどこぎ、腑分けする作業であり、過去時制の幻想を、たとえば迷信などと名付けて裁くことではない。いま／ここに在る者らもまた、別種の解釈の体系つまり世界観によつてささえられた幻想を、現実それ自体と錯誤しつつ生きていることに変わりはない。

遠野地方では、生者や死者の想いが凝つて出てあるく姿が、幻になつて人の眼に映ることをオマクという。(……) オマクはたしかに幻影である。しかし、臨終を間近にした娘の想いが、眼に見える形代と化して出歩くといった現象があることは、まったく疑う余地もなく、ひとつの現実として受容されている。娘の幻をありありと見た者は一人ではなく、かなりの数にのぼつた。白昼夢であるにせよ、これは多数の人間たちがそのとき／そこに共有していた幻であり、一個の現実であつた。隣家の娘の病氣を案じる棟梁のがわの想いが、あるいは娘の幻を呼び寄せたのかもしれない。その想いの強度に心を揺らすことのない者らの眼に、娘の姿がうつるはずはない。

ここでは、それらの「現象」が客観的事実か主観的事実かということとは、それじたい問われていない。遠野地方に特有の「オマク」という「別種の解釈の体系」の中で、自己の生にひととき現われ出た現実のひとつの経験として捉えられている。しかし、なぜそのような「現象」が生じうるのだろうかという問いは残される。

なぜ、被災地では不思議な話が次から次へと生まれているのか。偶然ではありえない。それは必要とされ

ているからこそ、次から次へと誕生しているのである。

被災地で亡霊を見た多くの人が、自分は幽霊など信じるほうではないし、幽霊を見たこともなかったという。それでも、こんなふうには噂が出るのは理解できるといのである。死者との遭遇・邂逅を期待するにしろ恐怖から避けようとするにしろ、少なくとも「突然の理不尽な死を迎えたのだから、出ないほうがおかしい」と考えられているようだ。もちろん遺族にとつてそれは決してただの怪談・恐怖譚ばかりではない意味を持つている。幽霊に遭遇する・したという話は、死に別れた相手とのリアルな交信の伝手でもあるだろう。かつてはともに暮らしていたのに、死者と生者の時間は死に別れを境にずれてゆく。死者の時間だけが終わってしまうからだ。それは生前の付きあいのあり方、関わり方をどのようにしても維持できないということの意味している。取り残された者はそれを厭い、死者の時間に寄り添おうとして心の時間を止めてしまう。だからこそ幽霊をめぐる話が生者にとつて、死者たちとの断ち切られた時間すなわち関係性を取り戻そうとすることの手筈になる。そのようにして死者との再会を望み、喪失を受け入れることができている者にとつては、死者にもう一度会つてその想いを問ひ尋ねたい、あるいは死者にみずからの想いを打ち明けたい、訊きたかったこと訊けなかつたこと、言いたかつたこと言えなかつたこと、感謝であれ謝罪であれ、すべてをありのままに伝えたいと願うだろうからである。

四 死生を物語ること

そうしたことをふまえたうえであらためて第九九話を読んでいきたい。

福二が浜辺で見た妻と男との関係は必ずしも過去のものではない。そのことは家庭において妻の死後明らかになつたわけではないだろう。夫は生前の妻の内心をそれとなく知りつつ、夫婦愛の微妙な不毛に煩悶しながらも耐え忍んできたのではなかったか。婿として妻の家にやってきた福二は、妻への疑いを抑えながら、どこか遠慮がちに夫としてのあるいは家長としてのふるまいをこなしつつづけてきたのかもしれない。そうした陰翳・齟齬を抱えながら彼らの家庭生活があつたのだとすれば、互いに内なる情念を秘めながら震災の悲劇は起きたことになるだろう。だから福二は単に妻子を喪つた悲しみを覚えただけではないはずである。妻への疑念はついに解かれることなくして突然断ち切られてしまった。それでもなお想いは彼の中にさまざまに残る。妻は自分と居て満たされていたのだろうか。本心ではかつての恋人の元へ行きたかつたのではないか。だとすれば——。そのようにして、妻からの別離の通告は、妻を亡くした福二の内面生活においてあらかじめ備給されつつけていたのではないか。彼は妻亡き後も、津波に流された「元の屋敷の地」に小屋を掛け、一年もとどまりつつけた。住み慣れた場所から離れたいだけでなく、海の彼方から妻子が戻ってくるかもしれないその側にいたい——と。妻への死してなおおえない未練と疑念とを抱きつつけながら、福二は日々を「妻亡き後」というかたちで過ごしていたことだろう。

そんなある霧の晩、誰もいないはずの波打ち際で、福二は妻と再びめぐりあう。だが、意を決して呼びかけた妻の横には無情にも生前「互に深く心を通はせた」という男がおり、福二は案じてきた夫婦の現実を眼前に突きつけられる。霧を透かして月が明るみに出したのは、無邪気に笑う幸福そうな妻の生き生きとした姿であつた。福二はずつと願つてきただろう妻との邂逅において、彼女から最終的な言葉を聞かされる。「今は此人と夫婦になりてあり」——。負い目を抱いた様子もなくかつての夫に笑顔を差し向ける妻に、福二はたまらず「子供は可愛くは無いのか」と最後の切り札を持ち出して詰問してしまう。そのとたん妻の顔は急激に曇

り、どうしようもなきに泣き出す。すぐに福二は、詮なき矛先を向けて愛する人の逃げ場をみずから断つてしまったことを後悔しただろう。妻の急所を衝き、追いつめてしまったことにいたたまれなくなったことだろう。取りかえしのつかない想いに、先ほどまでであった妻の「にこ」とした微笑がいつそう切なく彼の胸に残留する。悲しくて情けなくて所在なく立ちつくすしかない。もはやすべてが終わったのである。ここに至って彼の内で妻の喪失は決定的なものとなった。妻の何もかもが自分から離れてしまったことに気がつくも、とうてい納得しがたく、朝までそこに立ち呆けてわが身に起きた出来事を反芻する。そうして一人虚しく立ち帰って、長く煩悶と悲哀の苦に沈んだというのである。

出来事それじたいは無惨の極みにも思える。福二は二重の苦しみ、二重の喪失感を味わったろう。しかし、にもかかわらず、死後の邂逅において妻との齟齬・決裂は、致命的なまでに福二を傷つけただけではないはずである。むしろそこには生前頭わにはならなかった、はつきりと語られもしてこなかった妻の内心の偽らざる姿があり、それは子供をも振り捨てて恋人とともにゆこうとする妻のありようで、残酷なまでの徹しい「現実」ではあるが、それを福二がこうした「幻想」の中で、ありのまま、まざまざとまさに「眼前の事実」として目の当たりにしたことにおいて、かえって妻の「喪」すなわち妻との永訣が成就してくるからである。本来、故人が「いつたいどのような存在者であったのか」ということを知悉することは誰にもできない。にもかかわらずそうした有限性の中で、語り尽くせないという節度ある仕方をもって、事柄の是非を超えて故人に関する記憶を洗い出し、脚色なく語り継ぎ、故人（への思いのたけ）を語り終えようとするのが「服喪の儀礼」であるだろう。しかし福二においてそれは、妻の幽霊との出会いの契機、あるいはそのような物語的回路を辿ることなくしては困難なことであった。

福二は妻亡き後、それがどんなものであれ、自分の中に残された死者の痕跡を尋ね求めてきたことだろう。

東日本大震災では、津波で流されたアルバムが遺族にとつていかに大事なものだかが切実に語られていたが、そもそも福二の時代に妻の写真が必ずしもあったとは考えにくい。あるいは福二は亡き妻の顔を、思い出の中でもう見失いかけていたかもしれない。だから、霧の中から福二が妻の姿を発見したという出会いの物語は、彼が再び妻の顔に出会ったということの意味している。妻の「にこ」とした顔を見たとき、福二は妻の顔をはつきりと思ひ出す、という体験をしたのだ。霧が月明かりによつて一瞬の晴れ間を覗かせ、妻の表情を見せたというのも、福二自身の内的風景としては、そうした「顔を思い出す」という体験の質を物語っているだろう。そのようにして、死者である妻の剥き出しの素顔、自分の苦しみの偽らざるまを、その憂悶の内から語り直すとき、福二は「喪失」の悲しみから一足ずつ抜け出してくるのである。だからこそ、福二はこの本来秘められたはずの怪異を、語り残したのではないだろうか。福二が語り残さなければ、妻の「本心」も、一夜のこと、自分の悲しみも、すべて誰にも記憶されることも思い出されることもありはしなかったのである。それは妻との別離を受け入れていく「喪の仕事」にほかならないだろう。

鷺田清一は、被災者の負った心の傷は、何ほどか損なわれたみずからを、もう一度全的に「物語」として語り直すことにおいて、はじめて癒えてくると述べている。

震災で、津波で、原発事故で、家族を、職場を、そして故郷を奪われた人たちは、これまでおのが人生のそのまわりにとりまともてきた軸とでも言うべきものを失い、自己の生存について一から語りなおすことを迫られています。語りなおすとは、自分のこれまでの経験をこれまでとは違う糸で縫いなおすということです。縫いなおせば柄も変わります。感情を縫いなおすのですから、針のその一刺し一刺しが、ちりちりと、ずきずきと痛むにちがいません。被災地外の場所で、個々のわたしたちがしなければならな

いことは、まずはそういう語りなおしの過程に思いをはせつづけること、出来事の「記念」ではなく、きつい痛みをともしなう癒えのプロセスを、そのプロセスとおなじく区切りなく「祈念」しつづけることだろうと思います。

福二が妻との幸福とは言えない再会を、しかし「きつい痛み」をともしないながらも語り残したところに、福二の魂の救済もあつたように思うのである。そうした回復のプロセスそのものとして『遠野物語』第九九話は語り残されている。さすらう「靈魂」がそれを「観る者」を必要としたように、福二もまたこの体験について「聞く者」を必要としていただろう。その「聞く者」とは最終的には柳田であり、『遠野物語』を読む者であるだろう。そのようにして語られたのはありふれた「怪談」や「民話」にとどまるものではなく、人の「生」の姿を、その心の動きを、直截に描き出した「物語」なのである。

第九九話は、福二と妻との物語というより以前に、妻を看取つた、あるいは見送つた、何よりも福二自身の「物語」であり、妻との邂逅をめぐる苦悩の中心を、みずから口ごもることなく語り起こすことによつて、思い煩う自己の率直な「生」の様相は、それそのままに「救いと赦し」という自己肯定へと導かれていったのではないだろうか。さらにそれは『遠野物語』という「フォークロア」として再話される時、死者である妻だけでなく、妻に死なれた福二の魂をもともに鎮魂する物語となつたはずである。

忘れてならないのは、福二が妻に微笑を投げかけられていたことだ。それはまぎれもなく死者との交流であつた。福二にとつて妻はなお恨むべき対象ではなく、どこまでも思慕の人である。どれほど憎らしくても、その妻からあの時まず「にこ」と微笑みを与えられたことは、彼の「物語」のなかで妻＝死者からの一つの心遣りでもあり、妻との絆が断ち切られたのでも、妻と現世で夫婦であつたという縁を失つたのではないことを

指し示す希望の徴となつたであろう。

さらに言えば、この体験を語り直す福二の心の内において、妻の「にこ」という微笑は、いわば福二による亡き妻の魂の「荘嚴」にもなっているのではないだろうか。「荘嚴する」とは、仏教で死者に手向けの花を飾ることも意味するが、そのように死者を花飾ることをも指すこの言葉はしかし、それだけにはとどまらない語の沃野を持つている。社会学者の見田宗介は評論「世界を荘嚴する思想」の中で、水俣病の死者に寄り添おうとする石牟礼道子の「人間はなお荘嚴である」という言葉に触れながら、そこでの「荘嚴」という言葉は「死者たちを祀ることばかり、生者たちをも祀ることばへ転生している」とし、次のように語る。

ひとりの死者をほんとうに荘嚴するとは、どういうことだろう。その死身の外面に花を飾ることなく、その生きた人の咲かせた花に、花々の命の色に、内側から光をあてる、認識である。それは石牟礼が、その作品で、具体的に水俣の死者のひとりひとりを荘嚴してきたやり方である。

このようにしてそれはそのまま、生者を荘嚴する方法でもある。その生者たち自身の身体にすでに咲いている花を目覚めさせること。リアリティを点火すること。「荘嚴である」というひとつの知覚は、死者を生きさせるただひとつの方法であることによつて、また生者を生きさせるただひとつの方法である。

すなわちここでは、死者の魂の荘嚴と生者の魂の荘嚴が同じひとつのこととして語られている。妻の「にこ」とした微笑が、福二の心の内に月の光に照らされてまざまざと浮かびつづけている限り、そのようにして死者の魂が荘嚴されている限り、生者自身の魂はなお荘嚴であることができるのだろう。そのとき第九九話の「物語り」は「死者を祀ることば」から、「生者をも祀ることば」へと転生していると言えるだろう。

結び

かつて堀辰雄は古代の詩歌とりわけ「挽歌」に籠められた古代人の鎮魂の想いを認めつつ次のように述べた。

少くとも、僕は、さういふ古代の素朴な文学を発生せしめ、しかも同時に近代の最も厳肅な文学作品の底にも一條の地下水となつて流れてゐるところの、人々に魂の静安をもたらず、何かレクキエム的な、心にしみ入るやうなものが、一切のよき文学の底には厳としてあるべきだと信じて居ります。¹⁰

『遠野物語』とりわけ第九九話はその意味でも「よき文学」としての「挽歌」の正統に位置づけられるものと言えるように思う。一種の「レクイエム」としてのそれは、「フォークロア」の一ジャンルとしての「怪談」という我々自身の現実にとつて何ら影響を及ぼさないような「お話」のではなく、「喪失」を抱えて生きてゆこうとする者にとつて、むしろ希求されるべき「言葉」であり「語り」である。だからこそ、被災地に幽霊遭遇譚が一斉に溢れ出るということは、それだけ多くの「喪失」を抱えた人々が死者たちとの交信を希求しているということの顕勢的な徴候と見ることもできるのだろう。

残された者の「喪失」からの回復と再生は、およそ生者のみによつてなしうるものではない。残された者同士がいかに絆を強め、連帯しようとも、生き残つた世界がまさに生者のみで構成され、生者とのつながりだけで生きられる限り、死別の苦しみから離脱することはないだろう。死者への悼み／傷み／痛み／痛みなくして、死別の悲しみを越えて「いま・ここ」の「生」を生き抜くことはできない。死者という新たな存在者に呼びかけ、

死者からのまなざしを感覚すること抜きに、みずからが生き残つて「いま・ここ」に在ることの「かけがえのなさ」を自得することはできないからである。

それは『遠野物語』と同じ東北文化圏の生命観・宇宙観を持つ宮澤賢治にまで拡げて言えば、死者という存在軸を持たない三次元の水平的認識から、死者を傍らに指定し交響しようとする、いわば「四次元空間」における認識のリアリティへの「脱自」であり、彼我一如の「融通」^{ゆづり}性の獲得である。たとえば詩集『春と修羅』の序で賢治はそのことを次のように宣揚する。

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

風景やみんなといつしよに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにともりつづける

因果交流電燈の

ひとつの青い照明です

『春と修羅』は、自己という存在が「あらゆる透明な幽霊の複合体」として「風景やみんなといつしよに」明滅するありようをスケッチしたものである。このときの「みんな」の中には、死者も含まれているだろう。

賢治によれば、「わたくし」は盛んにせわしく「明滅」を繰り返している。それは、畢竟「わたくし」も「みんな」も、万物流転する無常の中で、ともにはかなく生き、死にを繰り返すような頼りない存在ということである。それでも「わたくし」は、死者／生者の境をも越えて、あらゆる「因果」関係の「交流」しあうところになお、「いかにもたしかにともりつづける」ひとつの「照明」として、「いま・ここ」に「現象」しているものである。¹²

賢治もまた、最愛の妹トシの魂の行方を弔問する（弔^{とど}う）かたちで、死者を「銀河世界」の彼方に追い求めた人であった。トシの死を悼んで『青森挽歌』『オホーツク挽歌』などの挽歌群を著した賢治は、喪失の激しい傷み／痛みの中から『銀河鉄道の夜』を構想し、「童話」というかたちで死者と交流する世界の「四次元構造」を、無辺宇宙の幻想の中にありありと描き出している。それは賢治にとつて単に「幻想第四次」であるだけでなく、まさしく賢治自身の生の実相であり生の現実であつただろう。そして賢治の「幻想」語りの中で、死者トシはどこまでも悼みつづけられ、「莊嚴」され、そのことにおいて賢治はかろうじてトシの喪失から自己回復していったのである。

『遠野物語』に立ち戻つて言えば、第九九話の「幻想」的な幽霊遭遇譚もまた、生者の側の「物語り」によつてはじめて見えてきた、たしかに「生きられた現実」だということである。

元々「挽歌」とは、古代中国で柩を挽きながら死者を悼んで歌われた歌のことであつた。それは死者の魂を鎮める「鎮魂歌」であり、また死者の魂の行方を追跡しようとする感性に根ざしていただろう。しかしそれは、死者の魂の实在を究理究明するということよりも、かけがえのない死者の記憶をその人の固有の魂として取り扱うということではなかつただろうか。非人称的な「死者」としてではなく、顔を持った個別具体的な他者存在としての立場を与えることにおいて、そして何よりも死者の素顔を「死なれた」者の想念の中でありのまま

のナラティブによってまざまざ描くことにおいて、死者を悼む「挽歌」は、「鎮魂歌」として成立するように思う。

東北に残された数々の逸話は、死者たちの記憶の残像を掘り起こす文化的な遺産である。だから、『遠野物語』だけでなく、土地土地に語り継がれた実話怪談を含む「フォークロア」をひとつの「挽歌」として読み直すことは、あらためて「死者」が何者であったのか、その消息を問い尋ねる——その意味で死者を「とぶらう」——追悼の意味を持ちうると言えるだろう。¹⁾

■註

- 1 死別の悲しみにおいて、「痛む」と「悼む」こととの語義上の連関性については、竹内整一『やまと言葉で哲学する「おのずから」と「みずから」のあわいで』（春秋社、二〇一二年）に詳しい。
- 2 『遠野物語』は、一九一〇（明治四三）年六月刊（聚精堂）。一九〇八（明治四一）年頃から佐々木喜善の語った話を基に柳田（当時三五歳）が著した。なお、本稿の柳田の引用はすべて『柳田國男全集』（筑摩書房版および同くま文庫版）を適宜参照し拠ったが、字体など一部表記を改めたところがある。
- 3 「怪談の研究」『中学世界』一九一〇（明治四三）年、三月号（博文館）。
- 4 柳田自身は「怪談」という言葉の持つ近世までの伝統的な荒唐無稽の趣味から距離を置いているため、その使用には慎重であったという。その点に関して東雅夫は『遠野物語と怪談の時代』（角川学芸出版、二〇一〇年）で、「一般に怪談といえは事実譚よりも、「四谷怪談」「牡丹燈籠」など虚構性や娯楽性が強調される歌舞伎や講談落語の演目のそれが連想されることを慮ったという可能性もある」ことを指摘している。
- 5 赤坂憲雄「『東北学』第二章への道」山田町田ノ浜／人は幽霊を求めている」（『新潮45』、二〇一二年五月号）。

- 6 赤坂憲雄『遠野／物語考』（筑摩書房、一九九八年）。
- 7 前掲註⁴。
- 8 鷺田清一「語りきれないこと——危機と傷みの哲学」（角川学芸出版、二〇一二年）。
- 9 見田宗介「世界を狂騒する思想」「現代日本の感覚と思想」（講談社、一九九五年）。傍点原文。
- 10 堀辰雄「伊勢物語など」、『堀辰雄作品集第五卷』（筑摩書房、一九八二年）。旧字体は新字体に改めた。なお初出は「魂を鎮める歌——いかに古典文学に対するかとの問に答へて」、『文芸』（河出書房、一九四〇年六月号）。
- 11 宮澤賢治「春と修羅」、『宮澤賢治全集1』（筑摩書房、一九八六年）。
- 12 なお「春と修羅」序において、そうした命題はすべて「第四次延長」の中で主張されている。
- 13 「弔い」を意味する古語の「とぶらふ」は、語源的には、訪^{たづ}う^なう^なことを意味する「とぶらふ」と同源である。訪^{たづ}う^なこととは問うことであり、すなわち死者のもとを訪い尋ねることである。つまりそれはまさに「弔問」を意味している。死者のもとを「訪れ」、その魂の安否を問い、その無念をありのままに余すところなく言問うこと——その意味で古来、死者を弔うことは、残された生者が、「あちら側」の存在となった無言の死者の魂を訪ね、死者の想いを尋ねることであった。

（はせがわ・とおる 専修大学人文科学研究科特別研究員）

Folklore's "Narrative" of Death and Life: Concerning the Ninety-ninth Legend of the *Tono* *Monogatari*

Toru Hasegawa

Recently, the Great East Japan Earthquake that caused untold casualties and deaths, caused many people in the Tohoku region, which was the area hardest hit, to experience the loss of loved ones. This means that there are naturally people who now have to live in face of these countless dead. In this sense, present Japan, as a society, might have to become engaged in "mourning work." If "to go into mourning" refers to grieve over a dead person by deeply engraving the loss (and the accompanying pain or sadness) into one's heart, then should human culture and society not incorporate "something monumental" that possesses this function of mourning? The original meaning of "monument" is "something that lets one remember." This shows that what is meant is not merely a formality, such as a memorial. A community as a cultural community is held together by the inherent omnipresence of bonds that bring to mind memories of the dead within the community. That means, the community possesses a rich spiritual landscape, or in other words an archive of views on life and death, as its ethical basis for dealing with the dead.

Among those who have investigated the location and form of the soul in Japan was the ethnologist Yanagita Kunio, who philosophized about the direction in which the modern Japanese were developing. What lay at the foundation of Yanagita's ethnology were the folk legends of the Tohoku region and those of the

town Tono in particular. His work *Tono Monogatari* (The Legends of Tono) from 1910 is a collection of these stories, which he heard from local resident Sasaki Kizen. In *Tono Monogatari*, Yanagita excavated the memory of actual people whose memory is normally lost to oblivion, presenting their raw self in an unaffected way. Thus, is *Tono Monogatari* not a requiem or elegy in the form of "folklore"?

In the ninety-ninth legend of the collection, a man who has lost his beloved wife and child to a tsunami one evening encounters the ghost of his wife. However, this is not a typical ghost story, but instead the story of a man who is crushed by grief at the sight of his wife trying to be reunited with her another lover in the afterlife. Simultaneously, by recounting his vivid experience in a straightforward manner, it is also the "story" of how the "life" of this worried man is led towards "salvation and forgiveness." It is a story that not only brings peace to the soul of the wife/deceased, but also to that of the husband/living. It may be said that *Tono Monogatari*, which collects the folk tales of the Tohoku region as narratives of life, is a cultural legacy that excavates the remainders of those who lived and died as "ordinary people." By re-reading *Tono Monogatari* as elegy, it might be able to gain a sense of mourning that inquiries into the circumstances of the dead anew. The tale of the ghostly encounter in legend ninety-nine represents a truly "lived reality" that becomes visible through the narrative of those left behind in the world of the living. *Tono Monogatari* is a "monument" depicting the form of life of real Japanese who lived and live in Tohoku.